

食の安全安心シンポジウム2015

基調講演議事録

【司会：木元】

お時間になりました。これより食品添加物をテーマにした食の安全安心シンポジウムを開催いたします。私、本日の進行を務めます大阪府健康医療部食の安全推進課の木元といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

開催にあたり、2点、注意事項がございます。まず1点目でございますが、携帯電話は他の方のご迷惑となりますので、電源をお切りいただくか、マナーモードにさせていただきますようお願いいたします。

それから、2点目でございますが、館内及び敷地内は全面禁煙となっておりますので、ご協力お願いいたします。

続きまして、配布資料の確認をさせていただきます。本日お配りしております資料ですが、次第と講演資料が合わさった冊子、食の安全安心メールマガジンの購読募集チラシ、大阪版食の安全安心認証制度のチラシ、それから一般社団法人日本食品添加物協会からご提供いただきました資料といたしまして「もっと知ろう！食品添加物」、「もっと知ってほしい 食品添加物のあれこれ」「テンカちゃんの豊かな食卓」、「一般社団法人日本食品添加物協会 協会案内」です。そして、最後に参加者アンケートを入れております。過不足等ございましたら、お近くの係員にお申し出くださいますようお願いいたします。

まず始めに、次第にありますとおり、基調講演としまして、毎日新聞社の小島様より「メディアが伝える食品のリスク」についてお話をさせていただきます。基調講演が終わりましたら、いったん休憩を挟みましてパネルディスカッションを行います。パネルディスカッションでは異なる立場のパネリストの方々に食品添加物についてさまざまな視点からディスカッションさせていただきます。

それでは早速、基調講演に移らせていただきます。毎日新聞社生活報道部 編集委員 小島正美 様より「メディアが伝える食品のリスク」について講演いただきます。小島様、よろしくをお願いいたします。

【小島氏】

皆さん、こんにちは。毎日新聞の小島といたします。私、医療、健康を半分ぐらい取材して、あとは消費者問題とか、環境問題も半分ぐらいやっている記者です。今日はメディアがリスクをどのように伝えているのかというのをお話して、その中に何か参考になることが得られればと思っています。今日の話はスライドにあるとおり、1から6ぐらいあります。

事前に質問いただいた中で何々が安全かどうか教えてほしいという質問がありましたけれども、例えば、皆さんが毎日食べている米の中にヒ素が入っています。これは発がん性

物質です。米には発がん性のカドミウムも入っています。しかもどの米にもほぼ 100%入っています。大なり小なり濃度が若干違うだけです。じゃあ、米は安全ですかと言われたら皆さん、どう答えますかね。

また、携帯の電磁波、これは安全ですか、危険ですか。

口紅も添加物がいっぱい。添加物を口に塗っているようなものですよね。じゃあ、口紅を塗っている人は「危険だけど、まあ美しくなるならいい」と思っているかどうか。

牛乳は一部の学者から危ないというデータがありますが、では牛乳は危険でしょうか。トランス脂肪酸はどうですか。こうやって考えていくと、一体安全とか危険って何なのかというのは意外に難しいものです。それを頭の隅に置いてお話をしていきます。

まずはトランス脂肪酸から始めます。

■ 良い油と悪い油はあるのか？

よく真実にたどり着くにはいろんな情報を読めばわかるんじゃないかと言われています。本当にそうでしょうか。このスライドに 2015 年 6 月 18 日の日経新聞の記事がありますね。そこには「食品添加物としてのトランス脂肪酸を全面的に禁止する」と書いてあります。実は、そこの部分がもう間違っているんです。トランス脂肪酸は食品添加物じゃありません。同じ間違いを時事通信も共同通信も犯しています。

次に週刊文春の記事を見てみましょう。トランス脂肪酸を恐怖だと言っています。危ないから摂らないほうが良いという週刊誌の記事ですね。翌週の特集には健康に良い油か悪い油か確かめようという内容が出ました。良い油の 1 位はエゴマ油、2 位は亜麻仁油。これらは n-3 系脂肪酸、要するにオメガ 3 系の油です。悪い代表はマーガリンといった書き方ですね。善悪を対比させる、よくあるパターンですが、これは正しいでしょうか。いうまでもなく、間違っています。

みんながこの週刊誌を読んだら、間違った情報を信じることになりすね。私の知っている人でもエゴマは健康に良いと言って、エゴマを大きじ 2 杯から 3 杯、毎日飲んでいた人がいます。がぶがぶ飲む感じでした。数年して死んでしまったんです。一例だけで判断をしてはいけないことは分かっていますが、そういう極端な信奉者が出てくるのが一番困るわけです。いくら良い油でも、油は所詮、油なんです。過剰に取れば、健康にはよくありません。

今度は NHK のニュースを見ましょう。NHK も週刊文春と若干似ていまして。「私はトランス脂肪酸を避けています」という外人を登場させ、その代わり、マーガリンやショートニングじゃなくて、バターでお菓子をつくった事業者の売上が伸びているというふうに報道していました。じゃあ、バターをたくさん摂ったらいいのかということ、そんなことはないです。バターには飽和脂肪酸がありますし、天然のトランス脂肪酸も含まれています。アメリカ人はもともとバターをたくさん取っていて、心臓疾患が多いので、マーガリンに替えたという経過がありますが、今度はまたバターに戻っただけで、何の解決にもなりま

せん。善と悪を対比させる報道の NHK は、ニュースのよくない面が出ましたね。ニュースの最後には、「表示なしでは消費者に不安ですね」と NHK の司会者の言葉がありました。要するに、表示がないと消費者が不安ですというメッセージです。やや大げさですね。

最近になって、日経新聞の記事がまた出ました。今度は、若い女性はトランス脂肪酸に注意する必要があるという内容です。心臓疾患のリスクを上げないために WHO（世界保健機関）は、トランス脂肪酸の摂取量を総エネルギー摂取量の 1%以下にしましょうという勧告を出しています。確かに大学生の中には、わずかとはいえ、1%を超えている人たちがいます。要するにビスケット、クッキー、ケーキ、菓子パンなどを毎日たくさん食べている人は要注意といえますが、表示が必要なほど危険かという、そうではないでしょう。しかも最近では、トランス脂肪酸の含有量は大幅に減っています。

食品安全委員会の調査でも、トランス脂肪酸の過剰摂取はごく一部の人たちだけです。まあ、人数で言えば、100 人のうち 2 人か 3 人くらいが要注意の感じですね。このために表示が必要という根拠にはならないと思いますね。

私の書いた記事は「気になるトランス脂肪酸」で、日経と全く違い、トランス脂肪酸は全面禁止ではありませんという内容。米国では 2018 年から食品添加物の扱いになりますよという内容です。日本人の平均摂取量の比率は 0.3%程度なので、規制の必要はありませんとも書いています。良い油も悪い油もありません。油はべとべととしていますよね。体の中にべとべとしたものがたくさん入れば、やはり健康にはよくないわけです。油自体の摂りすぎに注意しましょうという内容です。

ここで疑問がわきますね。どの媒体だったら、信じられるのかということです。

トランス脂肪酸でまとめてみると、朝日新聞も読売新聞も、私の毎日新聞とほぼ同じ論調で、日本人の摂取は少ないので、規制の必要はないという内容でした。ネットのニュースでは危ないを強調するものと、大丈夫を強調するものに分かれました。食品安全委員会が正しいことを言っているの、そっちのホームページを見ようというのがライブドアニュース。J-CAST ニュースは、「安全と認められないトランス脂肪酸が 2018 年に全廃されます、日本はこれからどうするんだ」というちょっと脅しのようなニュースです。メディアとも市民団体ともいえる FOOCOM（フーコム）の瀬古さんは、脂肪の摂りすぎは良くないという基本的なことを報道しています。

これらを見てもわかる通り、ネットと新聞ではかなり違うことが分かります。

まとめてみます。皆さん、新聞、テレビ、週刊誌、ネット、のどれを信じますか。その中に出てくる専門家を信じるのか、記事を書く記者を信じるのか、それとも事実関係の解明で信じるのか、判定方法を自分なりに決めておかないと、けっこう難しいことが分かりますね。

今回のニュースの背景で特徴的なことは、食品安全委員会が日経新聞の記事を見てすぐに Twitter で「間違っています」と、食品安全委員会に登録している記者たちに的確な内容を伝えたことです。そこで、多くの新聞社の記者は食品安全委員会の言っていることを主

に信じて書いたということです。

なぜ信じたのかというと、食品安全委員会は数多くの論文を精査したうえで結論を出しているという点です。個人的に週刊誌によく問い合わせをしますが、問い合わせに応じないんです。そういう記事は私は信用しません。問い合わせに応じないようなメディア媒体は信じてはいけません。買わないことです。

学者の意見をどう判断するかも重要です。週刊文春に出てきた学者の意見は、ごく少数派の意見です。少数派だから間違っているとも言えませんが、数多くの論文を精査したうえで発言しているかを確認する必要があります。その学者の過去の業績を見るのもよいでしょう。本当にその道の専門家なのか、学会に属する他の学者からどう判断されているのかも見るのが大事です。

■メタ分析で信頼性を判断する

メタ分析は結構、重要です。メタ析というのは、例えば、週刊誌の記事はひとつの動物実験だけで危ないといっていますが、これは科学ではありません。食品安全委員会はたくさん信頼できる論文を調べて、それらを総合的に分析して（メタ分析）、日本人にとってそんなにリスクは高くないと言っています。

もう1つ、ニュースの両論併記も要注意です。専門家の比率が、例えば、100人のうち、たった1人だけがトランス脂肪酸が危ないといっているのか、50人ずつに意見が分かっているのか。これを見極めるのが重要です。新聞の場合は50人と50人だろうが、99対1だろうが、同じように学者の意見を取り上げます。公平とはいえますが、判断に迷いますね。

今回をまとめてみると、主要な新聞は心配なし、NHKと日経はややあおったという感じです。一部週刊誌は大いにおおりました。ネットは半々に分かれました。

今回は、政府が毅然としていたという点は大きいです。一部のニュースに後押しされた世論に流されることがなかったということです。政府がしっかりしていれば、おかしなニュースが出て、大丈夫という例にもなりますね。

結局、こういうニュースの構図を見ていると、あおったニュースは一部の専門家や一部の市民の見解でつくられていることが分かります。こうも言えます。「ニュースはすべて記者の主観的な作品です」。私の記事も含めて全部作品です。記者が選び取った材料を記事として加工しているだけなので、すべて作品です。

NHKなので、信じられるかといったら、NHKも記者がつくっているだけなので、記者のバイアスが絶対入ります。だから、どんなニュースでもつくってしまうということです。どんなニュースでもつくってしまうと、じゃあ、何を信じるんだということになりますよね。それがさっき言ったメタ分析です。メタ分析、その専門家の業績、本当の専門家かどうかということを自分で判断するしかないです。

世の中に悪い化学物質と良い化学物質があるという二項対立的な報道はまず、科学的に言えば、間違っていると思ってよいでしょう。

トランス脂肪酸もたくさん摂れば、心臓病のリスクが高まりますので、確かに危ないんですよ。でも、ごく少量だったら危なくないので、結局、毒性は「量」次第なのです。その物質が悪いか良いかの話ではありません。

■がんの放置はよいか

どっちを信じるかという話ですが、最近、がんを放置したほうがよいという近藤誠先生の本が売れています。みなさんはこれを信じますか。近藤先生の本に対する反論の本がいくつか出ています。すべて読みましたが、どうみても近藤先生は議論では負けています。本当のがんの専門家で、毎日手術をしている医師の方が説得力をもっているということです。

近藤先生の言い分がすべて間違っているわけではありません。過去には乳房温存療法のパイオニアとして、また抗がん剤の副作用の問題点を指摘する点では意味があったのですが、だんだんと抗がん剤自体を否定するようになりました。やはり近藤先生は本当の意味でのがんの専門家ではありません。これもメタ分析で判断するのがよいでしょうね。私の知人が近藤先生を信じて、半ば放置したのですが、本当にあつという間に死んでしまいました。人の生き方なので、他人の私が介入する問題ではないかもしれませんが、それでも、真の専門家を見つけることがいかに重要かを物語っていますね。

ついでにですが、皆さんも保険に入る時によく高度先進医療という言葉聞きますね。この保険に入っておくと、高度先進医療が受けられるという文句です。先進医療といったら、すごく進んだ医療というイメージがありますので、入っておいたほうが得かなというところ、そんなことはないです。実は先進医療というのは患者の利益よりも研究者の業績を優先しているので、営利目的の商品の保険です。

ちょっと言い過ぎかもしれませんが、先進医療は有効性も安全性も十分に確立されていない治療方法です。要するに、標準治療になっていないのが先進治療なんです。だから、こんなのに飛び付いて自分が治ると思ったらよくないです。こういうことも意外と知られていないと思ってちょっと付け加えました。

今の話でわかるように、世の中には正反対の情報が氾濫しています。私は新聞記者として、これまでに1000人を超える専門家に会っています。私がいまこうして話をしている内容は、そうした多数の科学者の最大公約数的なものだと理解してください。私個人の意見ではありません。

■ミツバチと農薬

話が変わります。ミツバチと農薬をどう考えたらいいかという問題を考えてみます。ニュースによって、みなさんのイメージが固定されてしまうという点です。おそらく、みなさんが目にふれるのは、農薬でミツバチの群れが崩壊するという記事でしょう。たとえば、共同通信の記者が低濃度でも巣に戻らなかったという記事を書いています。他の専門家

がその実験の中身をよく見たら、えさに混ぜた量が低濃度だといっても、実際には、lethal dose 50 といって半分の動物、50%が死ぬ量の3倍を与えていたということだったのです。このことを東大、京大、農水の専門家5人が連名で雑誌に書いていました。

半分の動物が死ぬ量の3倍を与えれば、ミツバチは死ぬに決まっていますが、そういう意味のない実験を記者が喜んで書いているという事実です。

こういう記事を見たら、メーカーや専門家はメディアに訂正を出してほしいと求めるべきでしょうが、そういう動きはないようです。新聞社も昔と比べると、かなり読者からの求めには対応が良くなってきたので、訂正を出す可能性はあります。こういうケースがあれば、ぜひ、専門家は直接にメディアに言ってほしいですね。これがメディアのメディアアといって、チェックする機能です。

ミツバチと農薬の関係で皆さんの目に触れるのはミツバチに何か悪いことが起こったときだけです。農薬でミツバチが死にましたというケースはニュースになるんですけど、死ななかったという、ニュースにはなりません。なので、そもそも問題になっているミツバチは西洋ミツバチという外来種だということも意外に知られていないです。家畜として飼っている外来種だということです。

また、ミツバチの巣の崩壊現象はフランスやアメリカでは確かにそういう例が見られますが、日本ではミツバチの巣の数は1960年代よりも今のほうが多いんです。そういう情報は出てこない。じゃあ、なぜ、騒いでいるんだということになってしまいますよね。その記者はそういう事実を知っていても、多分記事には書かないということです。安全なら記事にならないというのと同じです。

ミツバチはニュージーランド、トルコ、アフリカではむしろ増えているんです。オーストラリアはネオニコ系農薬を使っているけど、何も起きてないんです。そういうニュースは私が知っている限りないです。結局、ニュースになるのはEUが2013年12月から予防原則を適用し、使用を制限したということだけです。これは全面禁止ではありません。ハウスでは使ってもよいのです。そういうニュースもあまり見たことがないですね。ネオニコ農薬を使わなくなると、今度は害虫がはびこって菜種の生産量が落ちてしまったという事実もありますが、それはニュースになりません。結局、みなさんに届くのは、悪い話、危ない話ばかりです。

この種の問題には「確証バイアス」がつかまといまいます。人はいったん何かが悪いと思えば、自分の思い込みに合った情報、ニュースばかりを見つけるという現象が起きます。例えば、ネオニコ農薬の細胞実験から、子供の脳の発達にも良くないと言っている人たちがいます。これはあくまで神経細胞の試験管レベルの話で、とても人への影響があるといえるレベルの話ではありません。しかし、どんなレベルであれ、危ない例だけが目に付くのが確証バイアスです。記者もそういう習性がありますね。悪いニュースばかりを追いかける習性です。だから、結局、ニュースからはミツバチの様子全体がよくわからないということになります。いま世界で起きている実態がニュースでは分からないということ

を覚えておいてほしい。

たとえば、今年夏、国立環境研究所でミツバチの専門家が集まって、議論しましたが、そこにいるとミツバチの全体像がよく理解できますが、そういう全体像に関するニュースは出てこない。これがニュースの限界かもしれない。

学者の中にも確証バイアスに満ちた人はいます。農薬を散布したあとに、倦怠、筋肉の痛み、記憶障害、頭痛、ふるえ、発熱をもった患者が病院に来たら、それらの症状は農薬のせいだと考えるような医師や学者も現にいます。そういう学者の発言を市民は信じ込みやすいですが、他の学者からは全く相手にもされていない例があることも知ってほしいですね。

今まで私はミツバチと農薬の関係をずっと追いかけていますが、ネットを見たりすると、アルミニウムでミツバチが認知症になるとか、いろいろな情報が出てくるんです。これまでアルミニウム、電磁波、ダニ、栄養不足、農薬、ウイルス、などいろんな原因が言われてきましたが、アルミニウムが悪いと思っている学者はアルミニウムに着目して研究しています。ここでもやっぱり確証バイアスがあるのではと思います。電磁波が危ないと思っている人は電磁波のせいにするわけです。やはり学者も自分の価値観にかなり左右される人種なんだという感じがしています。

■朱鷺は農薬で滅んだか？

どっちにせよ、危ないニュースだけが皆さんに届きます。例えば、遺伝子組み換え作物は安全ですという記事を出稿しても、おそらく載らないです。

農薬は悪というイメージはほんとうに定着していますね。佐渡など日本のトキはどういう理由で絶滅に追い込まれたか？とよく聞くと、7割前後の人は高度経済成長時代に農薬を使って、農薬のせいで滅んだと答えます。新潟県の発行している県報にもそれらしいことが書いてあります。例えば、1960年代でトキの体内から高濃度の農薬が見つかったとか。しかし、実は1934年に朱鷺は国の天然記念物に指定されています。これはまだ農薬が使われていなかった戦前です。絶滅寸前になったのは、なんと明治時代です。思い込みは恐ろしいですね。

全く話が変わりますが、私の母の例を挙げます。母が夜中になると、窓にトカゲが来るから不安だ、気持ちが悪いと私に相談してきましたが、近所の人に対処法を聞いたところ、母の気持ちはがらりと変わってしまいました。

近所の人「それはヤモリといって、漢字では家守と書くよ。金運もあるかもしれない」と言ったのです。この一言で母のリスク認知は変わってしまったのです。

正しい情報の提供でリスク認知が変わる例です。これは、統合失調症とか、うつ病の治療にも応用できます。認知行動療法です。薬は使わないですけど、物の考え方を変えて治すわけです。そこで変わるの「ものの考え方」だけです。ものの見方が変わると、薬を飲んだ時と同じ状況が生まれるわけです。つまり、ものの考え方が変わると、脳の神経伝

達物質も変わってくるということです。体の中で化学反応が起きるということです。だから、薬も、物の見方も、その意味では同じような作用をもっているということです。

みなさんの多くは、添加物は危ないと思っているかもしれませんが。しかし、専門家に一度、食品添加物に関する科学的な講義をしてもらい、その話をじっくりと聞けば、おそらく考え方は変わるだろうと思います。

たとえば、笹の葉やヒノキの葉からは抗菌作用のある抗菌物質が出ます。だから、菌が繁殖しにくいのですが、それは天然の化学物質の作用です。皆さんが笹の葉すしを買うときに、危ないという意識はないと思います。そこから抗菌作用のある化学物質が出てきているのに、危ないという意識がないのです。天然だから、ですね。

だったら、同じ抗菌物質を人工的に合成して、それをおにぎりにまぶして使っても、危ない意識は生じないはずなのに、ただ単に人工的に合成された化学物質ということで嫌われるわけです。なにかおかしいですね。

実際には、保存料のような添加物は、ちょっと使うだけで、賞味・消費期限の延長のほか、低温管理をやらなくて済みますので、エネルギーの使用削減、コストの増大の抑制、さらに食品廃棄の減少に役立ちます。

私なんかは、無添加だと逆に、開封した後、すぐに細菌やカビが増えて食中毒のリスクがあるので、気をつけます。細菌は目に見えません。無添加イコール要注意、というリスク観も必要ですね。

■消費者と専門家のリスク認知の差

これまでの話でおわかりのように、消費者のリスク認知と専門家のそれとはかなり違っていています。食品安全委員会が5月に発表した調査結果によると、健康に気を付けているものは何ですか？という質問に、市民と専門家ではすごい差があります。

市民は農薬の残留、食品添加物、ダイオキシン、プラスチックの容器から出てくる化学物質などを上位に挙げています。一方、専門家は、アレルギー、食べすぎ、偏った食事、お酒の飲み過ぎ、健康食品・サプリメントなどを挙げています。

なぜこの差が生じたのか。日本の消費者は、人工的に合成したもの、メーカーがつくったもの、ニュースになりやすいものを危険だと思っていることが分かります。

逆に、食べ過ぎ、アルコールの飲み過ぎなど自分の責任でなんとかなるものは、危険という意識が低いのです。ウイルスは怖いけれど、自然なものなので、専門家から見るほどの危険なイメージがない。

私が一番、言いたいのは、ニュース性のあるものを、市民が危ないと思っていることです。農薬、ダイオキシン、添加物、どれもニュースになりやすい。カビやウイルス、食べ過ぎではニュースになりません。

ここで、話を少し変えますが、ハザードとリスクを区別すると、そういう間違いは減るのではと思っています。日本語だと、どちらも危険となってしましますが、意味は違いま

す。

「ライオンは危ないですか」「農薬は危ないですか」「放射線は危ないですか」といった時に、リスクとハザードを分けて考えるわけです。ハザードは潜在的な危険性です。潜在的に有害な要因を持っているというものです。たとえば、ライオンは人を殺しますので、潜在的な危険性が高く、ハザードがあります。動物園で檻に入ったライオンはどうでしょうか。人間を襲ってくることはないので、リスクはゼロです。潜在的な危険性をもっていますが、実際的な危険性はないのです。

農薬も添加物も同じです。動物実験で大量の農薬を与えれば、それは危険に決まっています。しかし、それはハザードを判断するためにやった実験結果であり、人へのリスクではありません。食品中に残留する農薬はほぼゼロなので、実際のリスクはありません。

しかし、農薬にもハザードはあります。要は使い方次第です。リスクはちゃんと管理すれば、減らせるという事実です。農薬の使用基準を守って使えば、リスクはないのです。これは放射線や原子力発電でも同じです。

ただし、リスクはリスクだけでは判断できないという問題もあります。例えば、携帯電話の電磁波。これだって、大量の電磁波を浴びれば、リスクはあります。しかし、実際に浴びている電磁波が大量かどうかが問題なのです。さらに携帯は、使うことによるメリットがあるので、少々リスクがあっても、使うという選択も出てきます。リスクは、ベネフィット（便益、有益性）と比べて、判断する必要もあるわけです。

また、リスクは、減らすのはよいけれど、そのリスクを減らしたけれど、もっと大きい別のリスクが発生した、では賢い選択にはなりません。水道水を塩素殺菌すると、トリハロメタンという発がん性物質が発生しますが、塩素殺菌をやめると、コレラのような病原微生物が繁殖して人が死亡するリスクが出てくるので、塩素殺菌のリスクは受け入れようという選択も出てきます。

リスクは、そのリスクだけでは判断できない、という意味はそういうことです。

もう1つ、魚の中にはPCBも水銀もカドミウムもあります。先ほど言いましたように米の中にもカドミウム、ヒ素があります。じゃあ、危ないものが入っていたら、食べるのをやめますかということなんですけど、今度は食文化がからんできます。

日本人は米をずっと食べてきているので、少しぐらいリスクがあっても、食文化を廃止するようなことはしません。食文化の維持も重要だからです。しかし、米を食べない欧米人から見ると、米に含まれるカドミウムは、リスクあり、と映るようです。現にヨーロッパの人たちは米のヒ素やカドミウムの基準を厳しくしようとしました。日本はこれに反対しました。食文化を優先するからです。

ポテトフライなどに発がん性のアクリルアミドが含まれていますが、これも確かにリスクがありますが、ポテトフライはおいしいから、そのおいしさとの比較が出てきます。おいしいので、少々リスクはがまんする、という選択もあります。

ほんの少しリスクがあっても食べようという典型がアルコールです。アルコールの過

刺摂取は、がんの原因になりますが、みんな、アルコールを飲んでますね。おいしいからです。私はあまり酒を飲まないんですけど、これは本当に不思議です。

携帯の電磁波も同じでしょう。もし電磁波を発生させる電線がイヤなら、撤去ということになりますが、撤去するための費用も考えねばなりません。これがALARA（アララ）の原則です。社会経済的に合理的なコストの範囲内で対処することも重要です。使えるお金には限りがあります。こういう発想も大事ですね。

ついでにいうと、国際がん研究機関（IARC）がよく発表している発がん性のグループ分類もちゃんと知っておくことが重要です。

グループ1、グループ2A、グループ2B、グループ3、4と5段階に分かれています。グループ1は「発がん性あり」、2Aは「おそらく発がん性」、2Bは「発がん性の可能性あり」などとなっています。記者たちが書く記事をみると、この分類は危ない順番になっているようですが、それは全くの間違いです。危険な順番ではありません。

グループ1をみてみましょう。ダイオキシン、ヒ素、C型肝炎ウイルス、たばこ、太陽光線、アルコール、ハム・ソーセージ類などがあります。なぜ、アルコールとダイオキシンが同じ仲間で登場するのでしょうか。同じ程度に危ないからでしょうか。もし危ないなら、なぜ、多くの方はアルコールを毎日、飲むのでしょうか。

実は、この分類はハザードの分類です。別の言葉で言えば、科学的な証拠の順番で並んでいます。アルコールも、ヒ素も、人ががんを起こす証拠は十分にそろっています、という意味です。しかし、アルコールも少々たしなむ程度なら、何もリスクはありません。だから、みんなアルコールを飲んでますね。過剰に飲んだら、リスクが生じます。同じことはダイオキシンにもあてはまります。

グループ1になったから危ない、という発想は今日限りでやめましょう。

最後に、誤解の多い問題にもふれます。遺伝子組み換え作物です。もはや農薬を減らし、収量を増やし、労力を削減するなどのメリットは明らかであり、世界中に増えているという事実を知っておきましょう。安全性を問題にしている科学者はもはやゼロに等しく、論争にもなっていません。問題にしているのは一部の勉強不足の記者だけです。そもそも「組み換えでない」と表示された納豆にも、みそにも、組み換え大豆が1%くらい含まれています。1%も含まれていても、安全だという証拠です。農薬の基準は100万分の1の単位のPPMです。パーセントの単位で混入しているものが危ないはずはないです。

もうひとつ、最近では異物混入が起きて、ゴキブリ1匹だけで回収されたりしていますが、これは食の安全性とは全く関係ないことだということを知ってほしいです。世界を見渡せば、ゴキブリを食べている人たちもいます。なんでもかんでも回収するという風潮にも終止符を打ちたいですね。

異物混入は、お客に不快な気持ちを抱かせたという問題なので、顧客対応が基本です。企業が誠意をもって、説明すれば、大量の回収、食料廃棄は防げるはずですよ。

最後に、ニュースは有料の商品ということも覚えてほしい。有料の商品ということはパンやテレビと同じなので、メディアとして生き残るためには、おいしいパンをつくったり、性能のいいテレビをつくるのと同じように、読者のニーズに応えるニュースを流すことになります。

ということは、ニュースは面白いこと、初めてのこと、珍しいことを追求します。物語があること、市民のアクションもニュース性があり、重視します。今だったら、安保法案の反対のアクションですね。こうした3つの要素を重視してニュースをつくっていくんです。そうすると、先ほどのミツバチと農薬の話でもありましたように、科学的な話の全体像よりも危ないニュースだけがどうしても出てくるんです。安全な話よりも怖い話。統計的な全体よりは例外的な話。多数の人が安心していることよりも少数の人が不安だということをニュースにします。

その意味では、NHKだから、正しいということは絶対にありません。

例えば、2014年12月に放送されたスペシャル番組は、専門家から「間違いが50カ所ある」と指摘されています。こういう番組があるという事実も知っておきたいです。

やはり、今後、重要になるのは、「メディアのメディア」です。そういうサイトをぜひ、充実させていくことが必要です。

最後のまとめです。結局、食品添加物にしても何にしても、極端な考えに惑わされないことです。健康維持にも、ほどほど主義がよいです。ある特定の食べ物を信仰するのも要注意です。ちょっと気楽に構えるのがよいですね。

【司会：木元】

小島様、ありがとうございました。ここで10分間の休憩を取らせていただきます。あちらの時計で2時半になりましたら、第2部のパネルディスカッションを始めたいと思います。再開の時間までにはお席にお戻りくださいますようお願いいたします。